

4-10 これから生きる中での防災

自然災害は、今後もわれわれ人間が生きるとともに形は変えつつも共にすることになります。それに対して被害がないように、少なくなるようにつきあうことが大切なこととなりますが、前者に対しては早期に予知して避難すること、後者については促進するような行動を慎むということが求められています。そして、それにあたっては、それぞれにできることをできる範囲で行っていくということが大事になります。

自然災害は、科学的には未解明なところが多くて、確実な予知予測というところまでは至ってなくて、今までの経験の中で対応するというのが現状だと思います。その経験から課題というか、解決していくべき事柄としては、多くの情報を一元化して整理すること、今までの対策を適切に評価して、その投資効果を明確にすることが求められ、それに基づいての新たな防災対応を構想する必要があります。その過程は、修正、改善、付加というフレキシブルなものになるような気がします。

以下に今までことから、課題的なことを羅列してみたいと思います。

- ① 自然災害による被害を大きくしていることに、国土の利用の仕方、土地利用があります。これまでは、自然の営みに逆らうことなく土地利用をしてきたのですが、科学技術の発展もあって、自然現象を制御するような発想で開発というような作為が人間の活動範囲を拡大してきました。これは、つまりは地形、地質、植生といったことを無視することとなり、自然環境の有益性を脆弱化させてきたことにもなっています。加えて、国土の公有という概念が薄れて、私有権が拡大されてきたことがあります。そのために、自然災害に対する脆弱な体質になってしまっているということが、被害を受けることで気づき始めてきています。
- ② 災害が想定できるようなときには、警報や警告というような情報が伝達されます。最近では、その方法も質的にも向上されてはいますが、受け手の環境が良好でないという意味がありません。つまり、情報を適正に判断することができて、それに呼応しての行動が起こされないと被害を大きくすることになります。したがって、正しい知識と判断力の基礎づくりとしての防災教育を確実にしないとはいけません。つまり、生きるための学を学校教育の中で充実させるべきです。これは、防災だけではありません。経済、政治とともに国民の必修科目として生活学科として履修すべきです。
- ③ これらの提案については、費用と人材を確保する必要がありますが、費用は、これまでの防災に対する考え方を変えていくことで可能だし、今後を安全で安心に暮らすための投資であり、その緊急性に気づいてほしいと思います。

また、人材に関しては、定年、高齢者の方々にその人的資源があります。経験豊かな方々を活用していくような自由度の高い政策を立案していく必要があります。積極的な人材の発掘をしていくことをしていかないと、むずかしいものですが、昔取った杵柄ということがありますが、まだまだ眠っている資源が地域には多いと思います。生きがいと社会貢献が可能となる仕組みを構想していくということが必須になっていると思います。